

逆接仮定表現の一形式

——「さりとて」「さりとも」を中心に——

森脇茂秀

- 一、問題の所在
- 二、中古の「さりとて」と「さりとも」
- 二・一、「さりとて」「さりとも」用例数概観
- 二・二、先行説との関係
- 三、中世前期の「さりとて」と「さりとも」
- 三・一、古本説話集・宇治拾遺物語中の「さりとて」と「さりとも」
- 三・二、延慶本平家物語中の「さりとて」と「さりとも」
- 四、中世後期以後の「さりとて」と「さりとも」
- 四・一、キリシタン資料中の「さりとて」と「さりとも」
- 四・二、大蔵虎明本狂言集中の「さりとて」
- 五、おわりに

逆接仮定表現形式の史の変遷を明らかにすることで、その体系を構築することを目標としている。本稿では、「さりとて」「さりとも」を取り上げ、その史の変遷を明らかにした。

即ち、接続詞的用法（逆接仮定表現）「さり・とて」「さり・とも」から、副詞的用法（「まったく」「なんとかして」等の副詞句化）「さりとて」「さりとも」へ、と変容した結果、衰退した。これは、希望の助詞「がな」等と並行的に捉えられる。

一方で「さりとて」は「は」と複合した「さりとては」形となり、文語的な場面で「逆接仮定表現」として用いられた。

また、「さりとも」は、専ら「心話文」に用いられ、「へさりとも……否定」形「へさりとも……推量」形から「へさりとも（後件省略）」と「へ」と変容した結果、「さりとて」よりも早く文献から姿を消した、と考えられる。

一、問題の所在

「今昔物語」巻十一、本元興寺の建立にまつわる靈驗譚中、次のような一節がある（以下、傍線は稿者）。

木ノ空（ウツホ）ノ傍に竊（ヒソカ）ニ居（キ）ヌ。夜半（ヨナカ）ニ成ル程ニ木ノ空（ウツホ）ノ上ノ方（カタ）ニ多（オホク）ノ人ノ音（コエ）聞ユ。聞ケバ云（イフ）ナル様（ヤウ）、「カクテ度々（ドド）伐（キ）リニ寄来（ヨリキタレ）ル者ヲ不令伐（キラシメズ）シテ、皆蹴殺（クエコロ）シツ。サリトテ、逐（つい）ニキラヌヤウ有ラジ」ト云ヘバ、亦、異音（コトコエ）シテ、「サリトモ、毎度（タビゴト）ニコソ蹴殺（クエコロ）サメ。世ニ命不惜（ヲシカラ）ヌ者无ケレバ、寄来（ヨリキタリ）テ伐（キ）ラム者不有（アラジ）」ト云フ。

（推古天皇造本元興寺語第二十二）

『大系』三 一〇〇ペ／『全集』一五七ペ）

右は、木を切ると人が死んでしまうという理由を探るべく、僧が潜んで会話を聞いている、という場面の一節である。この中で逆接仮定の表現とされる「さりとして」「さりとも」が、近接した箇所で見られていることが分かる。

勿論、「さりとして」「さりとも」は近接した場面に用いられているため、単なる言い換えの表現、或いは同一語形を嫌ったため等とも考えられよう。

ここで「さりとして」「さりとも」の文末句に着目してみる。注釈書からすれば、「さりとして」の文末句は、打消推量の助動詞「じ」であり、一方「さりとも」の文末句は、「蹴殺さ『め』」即ち、「こそ」の結びとしての推量の助動詞「む」となっていることが解る。よって、この「さりとして」「さりとも」両者の文末句は、所謂〈推量形式〉である点が共通していると考えられるが、後に述べるように、平安中期の用法からすると、文末に「じ」を伴うのは専ら「さりとも」なのである。ここで、注釈書が説くように、仮に「蹴殺さめ」で文が終止した、となれば、「今昔物語」の成立時期においては、「さりとも」の用法が史的に変容したのではないかとする説が浮上するであろう。また、もう一つの解釈としては、「蹴殺さめ」では文が終止せず、この場面の「さりとも」は所謂「結びの流れ」である、と解し、引用節最後の「不有（アラジ）」までが「さりとして」後句である、とする説である。このように考えることができるが、「さりとも」後句との関係は一応説明できるのではないかと考えるが、「さりとも」と文末句との距離が気にかかるところである。いずれにしても「さりとして」と

「さりとも」には用法の相違点があるのであるか。問題点として残るであろう。

この「さりとて」「さりとも」については、平安時代の用法を中心にすでに詳しい考察がなされているが、中古以降の両者の変遷過程については、未だ明らかでない点^(作)が存していると考えられる。かつて稿者自身「とて」の成立過程、意味用法、変遷過程について考察したことがあり、その中で「さりとて」についても言及したことがあるが、ここでは「さりとも」等の、他の逆接仮定の表現形式との関係については触れなかった。

したがって、本稿においては、中古の用法を指摘した先行説を踏まえながら、「さりとて」「さりとも」両者の、史の変遷過程を明らかにすることによって、最終的には、両者ともに「逆接」の意を表すとされる「さりとて」「さりとも」について、「逆接表現形式」のなかで体系的に位置づけることを主眼としたい、と思う。

二、中古の「さりとて」と「さりとも」

二・一、「さりとて」「さりとも」用例数概観

まず、「さりとて」「さりとも」の各作品中の用例数を表にして示すと次のようになる(表Ⅰ)。両者は上代に確証例がなく、中古に入って文献に表れてくるようになる。

「さりとて」については、複合助辞化した「さりとて・は」「さりとて・も」も表に付したが、近世期に入ると、その「さりとて」は「さりとては」形へ集約されていることが分かる。即ち、「さりとて」単独形では用いられなくなるのである。

また、「さりとも」は、表からも分かるように中世後期頃より用例自体が見出せなくなり、この頃に衰退してゆく、と考えてよいのではないかと思われる。

二・二、先行説との関係

山口堯二氏は、『日本語接統法史論』(第三編 第十五章 二六三～二七七頁)で、「さりとも」「さりとて」それぞれの後句(文末語)に着目し、中古、特に平安中期『源氏物語』を中心に精査した結果、次のように両者の意味用法を指摘している。以下、纏めて示す(傍線、波線は稿者)。

〈「さりとも」について〉

・「さりとも」は逆接の仮定条件を示し、前文との関係では接統詞的に用いられる形式であるが、既存の現実を踏まえながら、その状況の好転を予想したり、期待したりする後句を導くことが多い。さらにその現状性を捨象して状況が好転することへの予想や期待を示す副詞に近い用法もめ

〈表 I〉

作 品 名	成立年代	さりとして 合計	さりとしては	さりとても	備考	さりとも
三宝絵詞	(984)	0				0
源氏物語		39	1	5		102
法華百座聞書抄	(1110)	0				1
古本説話集	(1126~1201)	5	1			5
佛教説話集	(1140)	0				0
千載和歌集	(1188)	0				0
宇治拾遺物語	(1210頃)	13	3			10
方丈記	(1212)	0				0
保元物語	(1221)	1	1			1
平治物語	(1221?)	0				2
宝物集	(鎌倉初期)	0				0
延慶本平家物語	(1309)	13	7	2		42
徒然草	(1330頃)	1				0
遊仙窟	(1344)	0				0
太平記	(1374)	5	5			15
湯山聯句抄	(1504)	1	1			0
中華若木詩抄	(1534?)	8	8			0
天草版平家物語	(1592)	2	1	1		9
天草版伊曾保物語	(1593)	2	2			0
天正狂言本	(1578?)	0				0
大藏虎明本狂言集	(1642)	8	8			0
大藏虎清本狂言集	(1646)	0				0
きのふはけふの物語	(1624)笑話	2	2			0
鹿の巻筆	(1686)笑話	10	10			0
軽口露がはなし	(1691)笑話	1	1			0
軽口御前男	(1703後)笑話	0				0
聞上手	(1772)笑話	0				0
鹿の子餅	(1772)笑話	0				0
鯛の味噌津	(1779)笑話	0				0
無事志有意	(1798)笑話	0				0
好色一代男	(1682)西鶴	2	2			0
好色一代女	(1686)西鶴	4	4			0
好色五人女	(1686)西鶴	8	8			0
日本永代蔵	(1688)西鶴	2	2			0
世間胸算用	(1692)西鶴	1	1			0
曾根崎心中	(1703)近松	0				0
冥土の飛脚	(1711)近松	3	3			0
国性爺合戦	(1715)近松	0				0
博多小女郎波枕	(1718)近松	0				0
心中天の網島	(1720)近松	0				0
女殺油地獄	(1721)近松	0				0
心中宵庚申	(1722)近松	0				0
雨月物語	(1768~76)	4				1
辰巳之園	(1770)洒落本	0				0
玉くしげ	(1787)	0				0
東海道中膝栗毛	(1802~09)	1	1			0
浮世風呂	(1809)	0				0
浮世床	(1813)	1				0
計		137	74	8		188

だつ。同じく既存の現状に基づき、逆接仮定的に用いられる形式には、「さり」とて」という形もあって、そのほうが「さりととも」よりも自省的に逆接仮定的な関係表示を担えた面がある。古代語における「さり」とて」には、「さりととも」のもつ用法の偏りを背後で補完していたことが考えられる。

・ 古代語の「さりととも」を前句とする仮定表現には、たんにその条件と対立する事態を導くという以上の、特殊な偏りがめだつ。「さりととも」には、話し手の意に叶わない現状を踏まえて、その状況の好転を予想したり期待したりする後句を導くことが多いのである。(中略)「さりととも」は仮定表現の前句として後句に予想的な表現を導くことが当然多いのであるが、中でもたとえれば次のように、助動詞「じ」による打消推量の形で後句が表現される例が多いのは、注意してよいことである。「さりととも」と相關する後句が、打消推量の表現になりがちなのは、すでに述べた話し手の意に叶わない現状を踏まえる傾向のもとに、そういう現状の存続を否定しようとする話し手の情意が、おのずからそういう否定態の表現を多くするためであろう。

・ 「さりととも」の「さ」の基本的な用法は現状指示と見て

よいから、意に叶わない現状の好転を予想・期待などする表現の「さりととも」も、本来基本的には「(今)さりととも」というほどの意を担うことになってよいはずである。しかし、中古語の「さりととも」には、そういう一つの事態としての具体性や現状性は捨象して、意に叶わない現状そのものの表示よりも、むしろ状況が好転することへの予想や期待を示す副詞に近くなっている例も、すでに多いようである。

〈「さり」とて〉

・ 結論を先に言えば、「さり」とて」は「さりととも」の逆接仮定条件句やその一語化としての接続詞的な働きを補完し、それによって先述のような「さりととも」の副詞化の一面を、その背後で支えていたところがあるように思われる。

・ その後句に打消や反語の表現が多いことは、「さりととも」についても触れたが、「さりととも」のように意に叶わない現状を踏まえる傾向は「さり」とて」にはないので、「さり」とて」の導く後句に、打消・反語表現が多いのは、その関係表示を担う「とて」の表示性に起因するものであろう。

(中略) 順接・逆接に関して文脈依存적であった「さりとて」は、事実上の逆接的な意味関係に用いられても、順接

的な事柄の導かれる可能性を併せて考えさせるところがある。「さりとて」はその点で、それだけ自省的な表示形式になりえたであろう。「さりとて」の導く後句が打消や反語と共にしやすいのは、その自省的に関係を表示できるという点によることと考えられる。

山口氏は、「さりとも」のように意に叶わない現状を踏まえる傾向は「さりとて」にはない」と指摘しているが、氏は、両者の関係を〈相違点〉と捉えるよりは、むしろ〈補充〉の関係として捉えているようである。

また、「さりとも」は仮定表現の前句として後句に予想的な表現を導くことが当然多いのであるが、中でもたとえば次のように、助動詞「じ」による打消推量の形で後句が表現される例が多いのは、注意してよいことである」と指摘されている。

ここで再び冒頭で挙げた「今昔物語」巻十一推古天皇造本元興寺語第二十二」の例に話しを戻したい。問題は「さりとて」の文末句であり、「じ」との共起については、『源氏物語』（平安中期）の用法から『今昔物語』（院政期）の頃にはすでに用法が史的に変容しているのではないかとする説と、「結びの流れ」と解する説を提起した。

これを踏まえて中世期以後の「さりとて」「さりとも」

を考察しようと思う。

三、中世前期の「さりとて」と「さりとも」

三・一、古本説話集・宇治拾遺物語中の「さりとて」と「さりとも」

『古本説話集』には「さりとて」が五例（内「さりとて」は一例）、「さりとも」五例用例が存する。〈表I〉を見ると、『古本説話集』『宇治拾遺物語』中には「さりとて」と「さりとも」が同一作品中で使用され、しかも用例数がほぼ同数であり、両者の意味用法を考察する上で重要であると考えられる。

以下、用例に則してコメントする。

〔用例一〕目くるめく心ちすれば、暫しもえみず。すべきかたなければ、さりとてあるべきならねば、家にゆきて、かうくといへば、妻子ども泣き迷へどもかひなし。

〔古本説話集〕巻下 第六十四 一一三オ 二二五ペ

〔用例二〕（略）（略）やうくづもこそはし候はめと思ひ候ふを、いかゞ候ふべき」と泣き臥したるほどに、夜明けぬれば、「さりとてあらんやは」とて、はじめ呼びしところへ往ぬ。

〔古本説話集〕巻下 六十七 一二七オ 二五三ペ

「用例三」いまはむかし、小松の僧都と申す人、おはしけり。まだ小法師にてのをり、山より鞍馬へまゐり給ひけり。(略) 百日まゐり給ふ程に、ゆめみねば、二十三百日まゐりて、おなじくは千日まゐるに、ゆめみえねば、「さりとてはいかでかざるやうはあらん」とて千日まゐるほどに、なほゆめみねば、三千日まゐりありくに、ゆめみえず。

〔古本説話集〕巻下 六十八 一二九オ 二五七ペ)

「用例一」の「さりとて」の後句は「あるべきならねば」となっているが、この「さりとてあるべきならねば」形は、他に三例用例が存する。「用例二」も後句に「あらん」が存在し、また反語「やは」と「用例一」打消の助動詞「ず(ね)」との共通性を指摘できる。

「用例三」は「さりとて」と「は」の複合した「さりとては」の用例であるが、「用例二」の後句「あらん」と同一であり、『古本説話集』中では「さりとて」の後句に必ず「あらん」が表れ、形態的に統一されていると思われるほどである。

「用例四」(略) そち殿よりはじめて、そこらの上達部・殿上人、心にくく思ひければ、「さりとともこの大納言故なくは詠み給はじ」と思ひつゝ、いつしかそち殿よみあげ給へば、(略)〔古本説話集〕巻上 第二 一二ウ 二四ペ)

「用例五」いかゞはせむとて、たゞ「あ」と言請けをしゐたり。「さりととも同じ日はさのみやはいはむ」と思ひてある程に、(略)

〔古本説話集〕巻下 第六十七 一二六オ 二五一ペ)

「用例六」(略) 大納言「いみじくさぶらふわざかな。此度は誰もえ詠みえぬ度に侍るめり。中にも公任をこそ、さりとともと思ひたまひつるに、『きしのやなぎ』といふ事を詠みたれば、いとことやうなる事なりかし。(略)〔略) (略)

〔古本説話集〕巻上 第二 一二オ 二三ペ)

「用例四」は、後句に打消推量の助動詞「じ」があり、平安中期の特徴的な用法と同質である。「用例五」は後句の文末語が推量の助動詞「む」であるが、反語「やは」があり、「用例四」とは〈否定〉という点で、共通する。「用例六」は「さりととも」の後件句が省略された形であり、引用の助詞「と」句が承ける形となっているが、これら「さりととも」に共通するのは、すべて心話文に表れるということである。

『宇治拾遺物語』には、「さりとて」が十三例(内「さりとて・は」三例)、「さりととも」が十例、用例が存している。

「用例七」是も今は昔、比叡の山に兒ありけり。僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かゝもちひせん」といひけるを、此の兒、心よせに聞きけり。さりとして、し出ださん待ちて寝ざらんもわるかりなんと思ひて、片方によりて、寝たるよしにて、出でくるを待ちけるに、すでにし出だしたるさまにて、ひしめきあひたり。

(兒のかいもちするに空寝したる事 卷一ノ二一 七〇ペ)

「用例八」かやうにあまたゝび、とぎまかうぎまにするに、露ばかりもさはぎたるけしきなし。希有(けう)の人かなと思ひて、十餘町ばかり、具してゆく。さりとしてあらんや、はと思ひて、刀をぬきて走りかゝりたるときに、そのたび、笛を吹きやみて、たち歸へりて、「こはなにもものぞ」と問ふに、心もうせて、吾(われ)にもあらでつい居られぬ。

(袴垂(はかまだれ) 合ふ保昌に事

卷二ノ一〇 一〇七ペ)

「用例九」あやしさに、かいさぐりて、「はや死給にたり。いみじきわざかな」といふを聞きて、ありとある殿上人、藏人、ものもおぼえず。物おそろしかりければ、やがて向きたる方ざまに、みな走ちる。頭中將、「さりとしてあるべきことならず。これ、諸司の下部めして、かきいでよ」とおこなひ給。(藏人頓死の事 卷一〇ノ八 二九七ペ)

「用例十」つくりたる田のよくて、こなたに作りたるにも、

ことの外まさりたりければ、おほく蒞置きなどして、さりとしてあるべきならねば、妻男(めおとこ)に成にけり。

(妹背嶋(いもせじま)の事 卷四ノ四 一五八ペ)

「用例十一」かへるべき方もおぼえねば、嶋におりていひけるやう、「今はすべきかたなし。さりとしては、命を捨つべきにあらず。此食ひ物のあらんかぎりこそ、すこしづゝも食て生きたらめ。これつきなば、いかにして命はあるべきぞ。いざ、この苗の枯れぬさきに植ゑん」といひければ、(略)(妹背嶋(いもせじま)の事 卷四ノ四 一五七ペ)

「用例十二」興福寺の南大門の壇の上のぼりたちて、今や龍の登るかゝと待ちたれども、なにの登らんぞ。日も入りぬ。暗々になりて、さりとしては、かくてあるべきならねば、歸りける道に、ひとつ橋に、目くらが、わたりあひたりけるを、この惠印「あな、あぶなのめくらや」といひたりけるを、めくら、とりもあへず、「あらし、鼻くらなら」といひたりける。

(藏人得業(とくごふ) 猿澤の池の龍の事

卷一ノ六 三一六ペ)

「用例七」は、後句が所謂完了の助動詞「ぬ」の未然形と推量の助動詞「む(ん)」の融合形「なん」であり、「さり」とて」が逆接の意を担っている。「用例八」は『大系』頭

注」に、「それにしてもこのままで引きさがるわけにはいかないと思つて」とあるように、後句が「やは」で「反語」となっている例である。「用例九」は「さり」とて「後句が打消の助動詞「ず」となっており、「用例十」は「さり」とて「確定条件節」にあり、その中で、「さり」とて「後句に打消の助動詞「ず」の已然形「ね」が存しており、「さり」とて……〈打消〉ば」形となっている。「用例八」は「反語」、「用例九」「用例十」は「打消」であり、これらに共通しているのは〈否定〉表現ということであろう。また、「用例七」の後句は「推量」であるから、「さり」とて形式は、後句が〈未定（未然）〉の事柄である、とも指摘できるように思われる。

「用例十一」「用例十二」共に「さり」とて」と「は」の複合形「さり」とては」であるが、これらは基本的に単独形の「さり」とて」と対応しており、「用例十一」は「用例九」「さり」とて……ず」、「用例十二」は「用例十」「さり」とて……ね（ず）」と同質のものである。

ただ、これら「さり」とては」形は、後句が〈未定〉の中て、推量形式ではなく「否定（打消）」表現であることが、「さり」とて」単独形と相違しているとも考えられるであろう。

一方、「さりとも」については、平安中期の「さりとも」は、「仮定表現の前句」として後句に予想的な表現を導くことが多く、後句に打消推量「じ」が表れることが多かったのであるが、『宇治拾遺物語』にも次のような用例が存する。

「用例十三」この駿河前司は、いみじう力ぞつよかりける。いかゞせん、明けぬとも、この局に籠りゐてこそは、ひき出でに入りこん者と執りあひて死なぬ。さりとも、夜あけてのち、吾ぞ人ぞと知りなんのちには、ともかくもえせじ。従者ども呼びにやりてこそ、いでもゆかめ、と思ひたりけり。

（季通わざはひにあはむとする事 卷二ノ九 一〇四べ）
「用例十四」心中に、さりともよもせじと思ひければ、かたくあらがふ。聖寶、大衆みな催しあつめて、大佛の御前にて、金打ちて、佛に申してさりぬ。

（聖寶僧正一條大路わたる事 卷二ノ八 三四〇べ）

この「用例十三」「用例十四」は後句の文末詞が「じ」であるが、「後句に予想的な表現を導く」形式の一つで、後句に表れる所謂打消推量の助動詞「じ」については、「院政鎌倉期になると口頭語から次第に遠のき、「まじ」が

進出した^(作)」という指摘があることから、中世期に「さりとも……じ」形が少数となる理由は、専ら「じ」の側に原因があるのではないかと考えられよう。が、一方で「じ」に取って変わったとされる「まじ」と「さりとも」は以後の作品においても共起する例は少数であることを考えると、「じ」のみにだけ衰退の原因があるのではなく、「さりとも」句全体で考察しなければならぬのではないかと考えられる。因みに『宇治拾遺物語』には「じ」が七十七例に対し、「まじ」四十例用いられており、「さりとも」と「まじ」とは共起した例はないのである。

「用例十五」「こはいかに、かくてはおはしますぞ」といへば、ほろくと泣きて、「わぬしがせいする事をきかず、いたく此の鹿をころす。我鹿にかはりてころされなば、さりともすこしはとゞまりなんと思へば、かくて射られんとして居(お)るなり。口惜しう射ざりつ」とのたまふに、この男、ふしまろび泣きて、(略)

(龍門聖鹿にかはらんとす〔る事〕 卷一ノ七 六四べ)
「用例十六」此童も心得てけり、うるせきやつぞかし、さ心得てば、さりとも、たばかり事あらんずらむと、童の心をしりたれば、たのもしく思ひたるほどに、大路に、女こゑして、「ひはぎありて人ころすや」とをめぐ。

(季通わざはひにあはむとする事 卷二ノ九 一〇四べ)
「用例十七」これをだにあやしと思ふほどに、馬ひきいだして、「この馬、はしのに給はり候はん」とて、ひき返して去ぬ。衣をとりて来れば、さりとも、これは得させんずらむと思ふほどに、「冬そぶつに給はり候はん」とて、とりて、「さらば歸らせ給へ」といひければ、夢にとびしたるらん心ちして、いでて去にけり。

(くうすけが佛供養の事 卷九ノ四 二七三べ)
「用例十八」(略) 聲を聞かれたてまつりて、帰りいでて、この隣なるめらはの、くそまりめて待るを、しや頭をとりて打ちふせて、衣をはぎ侍りつれば、おめき候(ひ)つる聲につきて、人々出でまうできつれば、今はさりとも出でさせ給(ひ)ぬらんと思(ひ)て、こなたさまに参りあひつるなり」とぞいひける。童子なれども、かしこく、うるせきものは、かゝることをぞしける。

(季通わざはひにあはむとする事 卷二ノ九 一〇六べ)

「用例十五」は「さりとも」の後句が完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に推量の助動詞「ん(む)」が承接した「な・ん」、「用例十六」は「んず・らむ」、「用例十七」も「用例十六」同様「んず・らむ」であるが、共に心話文中に「さりとも」が使用されており、後句が、「さりとも……

「心話」の例である。「用例十八」は「ぬ・らん」であり、これらは「用例七」強意・強調形「さり」とて……なん」に対応している、と考えてよいであろう。このように文末句が助動詞の接続で、所謂〈強意・強調〉形となる形式が、「さりとも」には多く見られるということも特徴であるといえよう。

「用例十九」世の色このみにて有(り)けるに、文やるに、にくからずかへりごとはしながらか、あふ事はなかりけり。しばしこそあらめ、遂にはさりともと思ひて、ものあはれなる夕ぐれの空、又月のあかき夜など、艶に人の目とゞめつべき程をはからひつゝ、おとづれければ、女も見しりて、なさは交しながら、心をばゆるさず。

(平貞文・本院の侍従の事 卷三ノ一八 一四八ペ)
「用例二十」いとあやしく思ひて、使をたづぬれど大かたなし。これを明けてみれば、白き米と、能き紙とを一長櫃いれたり。これは見し夢のまゝなりけり、さりともとこそ思ひつれ、是ばかりを實にたびたると、いと心うく思へども、いかにせん、此の米をよるづにつかふに、唯同じ多さにて、盡くることなし。

(自り賀茂御幣紙米等給ふ事 卷六ノ六 二〇六ペ)

「用例十九」は心話文(引用句)中に「さりとも」が使用されているが、「さりとも」の後句は省略されている。ここの文意は「しばらくの間はそうやっていられるだろうが、ついには(それでも何とかなるだろう)であろうが、この「さりとも・と(引用)」は後句が省略されることによつて、後世「熟語」として意識された。特に「用例二十」「さりともとこそ」は四・一に後述するように、『日葡辞書』に記述があり、その慣用句化が窺えるのである。「さりとも」句は、特に「引用節(心話文)」との密接な関係がある、と考えられる。

三・二、延慶本平家物語中の「さり」と「さりとも」

まず、「さり」とて」について見ると、『延慶本平家物語』では「さり」とて」は十三例用例が存するが、「さり」とて」単独形では四例と少なく、助辞「は」と複合した「さり」とて」形が七例、助辞「も」と複合した「さりとも」が二例である。このことは、既に「さり」とて」単独形では用いられなくなり、「さり」とて」形に集約されつつある姿を映している、と考えられるのではないか。

「用例二十一」新中納言宣(のたまひ)ケルハ、「能登守

(のとのかみ)、イタク罪ナ作り給ソ。シヤツバラケシカル者共トコソミレ。無詮(せんなし)トヨ。サリトテ吉敵(よきかたき)カハト宣ケレバ、能登殿ハ大童二成テ、「我生取(われいけどり)ニセラレテ、鎌倉ヘ下ラント云志アリ。寄合ヤ者共、ト(取)レヤ者共」トチ、判官(はうぐわん)ノ船ニ乗移ラレニケリ。(第六本 下 四〇五ペ)「用例二十二」日来(ひごろ)ハ法皇ノ御幸ヲモナシ奉ラムト、支度(したく)セラレタリケレドモ、ワタラセ給ワネバ、タノム木ノ本二雨ノタマラヌ心地シテ、サリトテハ行幸アルベシトテ、主上ヲス、メ奉テ、鳳輦(ほうれん)ニタテマツリテイデサセ給フ。(第三末 下 七〇ペ)

「用例二十三」北方ハ此ノ有様ヲ伝ヘ聞バ、「只イカナラム人ヲモ語テ、心ヲモナグサメ給ヘカシ。サリトテモ、愚(おろか)ニ不可思物(おもふべからざるもの)ヲト、其(それ)サヘ心苦クオボシテ、常ハ引カヅキテ臥給モ無慚也。(第四 下 一七九ペ)

「用例二十一」は「さりとて」単独の用例で、後句に反語「かは」が存する。「用例二十二」は係助詞「は」と複合した「さりとては」の用例であるが、後句は推量の助動詞「べし」であり、肯定形となっている。「用例二十三」は係助詞「も」と複合した「さりとても」形であるが、否定語

「ざる(ず)」と共に、助辞「ものを」が共起している。後句が「否定」であるならば、一般的に言えば、助辞「も」との複合形「さりとても」形が勢力を拡大するはずであるところが、〈表Ⅰ〉に示したように、後世「さりとては」形が文献によく散見するのに対して、この「さりとても」形は他の文献にあまり広がりを見せないのである。あるいは、「さりとも」が文末句中に〈否定〉と共起するという用法が先行していたためではないかとも考えられるが、結論は保留したい。

次に、「さりとも」について。中世以後、「さりとも」は次第に衰退して行くことは前に述べたが、この『延慶本平家物語』では〈表Ⅰ〉から四十二例と比較的纏まった例を見せる。ここで「さりとも」の後句を纏めて表にして示すと〈表Ⅱ〉のようになる。

この〈表Ⅱ〉より、「さりとも」の後句は、

(一) 打消の助動詞「じ」十二例、

(二) 「よも」があり「じ」が省略されたと明らかに考えられるもの一例を含む、

(三) 「べし」「らむ」等の推量の助動詞系十六例、

(四) 「さりとも・と」形十一例、

その他三例、

〈表Ⅱ〉

後句	用例数	備考事項	
じ	12		
		じ・ものを	5
		よも()ぞとおほゆる	1
べし	5		
		などか…・べき	3
		などか…ざるべき	1
		たれかは…・べき	1
らむ	1		
ぬ・らむ	1		
むず	1		
むず・らむ	6		
む	2		
		こそ…・め	1
		ざらむ	1
さりとも・と	11		
		さりとも・と	7
		さりとも・とこそ	4
		歌語	1
こそ思いつれ	1		
もや	1		
さうらふ	1		
計	42		

と、ほぼ三用法に類別できると見てよいであろう。これは、『古本説話集』『宇治拾遺物語』中の「さりとも」の用法と基本的に同質のものであると考えられる。

(一)「じ」系

〔用例二十四〕「タトヒサリトモ、アレ躰ノ人ノ習(七)ナレバ、一スヂニは思給ハジ。アマタヲコソ見給ハンスラメ」ト思シホドニ、其義モ無テ、打捨奉リシ事ノアヘナサ、申ハカリ無リキ。(第一本 四四八)

〔用例二十五〕「(略)何ナル者ノ漏シツラム。北面ノ輩の中ニゾ有ラム。小松大臣ハ見へ給ハヌヤラム。サリトモ思放給ハジ物ヲ」ト被思ケレドモ、誰シテ宣ベシトモナケレバ、涙ヲコボシ、汗ヲ流シテゾオハシケル。

(第一本 一二四八)

〔用例二十四〕は文末に「じ」が存することを考慮して、「さりとも」の用例にカウントしたが、副詞「たとひ」との関係からすれば、「さりとも」と捉えるよりも「タトヒ(サリ)トモ」と捉え、「さり・とも」は二語として捉える方が適当であるかもしれない。ただ、ここで指摘しておきたいのは、仮に「さり・とも」と捉えたとしても、後句に「じ」が共起している、ということである。この「たと

ひ」と「さりとも」との関係については後の四・一で述べ
る。

一方、「用例二十五」は「さりとも……じ・ものを」形
であるが、この「じ・ものを」形は「じ」系十一例中五例
を占め、「用例二十三」「さりとも……ざるものを」と対
応関係にある、考えられる。

(二)〔推量の助動詞〕系

〔用例二十六〕(略)娘ニテ候者ノ、余(リ)ニ思(ヒ)
沈ミテ、命モアヤウク見ヘ候ニ、常ニ立ヨリテ、『アナガ
チカクナ思ソ。教盛サテアレバ、サリトモ少将ヲバ申預ム
ズルゾ』ト、ナグサメ申候ヘバ、顔ヲモテアゲテ、教盛ヲ
打見テ、涙ヲ流(シ)テ引カツキテ候。

(第二本 二三四べ)

〔用例二十七〕新大納言ノ嫡子、丹波少将成経、歳廿二
ナリ給(フ)ハ、院ノ御所ニ上臥シテ、未だ罷(リ)出ラ
レヌ程ナリケルニ、大納言ノ御許ナリツル侍一人、院御所
ヘ馳参テ申ケルハ、「(略)」ト申ケレバ、「コハイカニ」ト
アキレ給テ、物モ覚ヘ給ハズ。「サリトモ宰相ノ許ヨリハ、
カクト申サレンスラン」ト思給シホドニ、宰相ノ許ヨリ使
アリ。

(第一末 一三六べ)

〔用例二十八〕佐大夫ハ馬ヨハクテ、宮ノ御共ニモ参り着

カズ。後ロニ敵(かたき)馳係リケレバ、不力及シテ、馬
ヲ捨テ、ニエ野ノ池ノ南ノハタノ水ノ中ニ入テ、草ニテ面
ヲカクシテ、ワナ、キ伏リケレバ、軍兵共ノケ甲ニテ、我
先ニトハセ行。オソロシサ、ナノメナラズ。「宮ハサリト
モ、今ハ、木津河ヲバ渡テ、奈良坂ヘモカ、ラセ給ヌラム」
ト思ケル程ニ、淨衣キタル死人ノ頸モナキヲ、昇(かき)
テ通りケルヲミレバ、宮ノ御ムクロ也。

(第二中 三八六べ)

〔用例二十九〕建礼門院后ニ立セ給ヒシカバ、何(いか)
ニモシテ皇子誕生ア(ツ)テ、位ニ即奉リ、外祖父ニテ弥世
(いよいよ)ヲ手ニ挙(にぎ)ラムト思ワレケレバ、入道、
二位殿、日吉社二百日ノ日詣ヲシテ、祈申サレケレドモ、
其モシルシ無リケルホドニ、サリトモナドカ我祈申ムニ叶
ワザルベキトテ、殊ニ憑進(たのみまらせ)ラレタル、
安芸国ノ一宮、厳嶋社ヘ月詣ヲ初テ被祈申ケルニ、三ヶ月
ガ内ニ中宮タナラズ成ラセ給テ、例ノ嚴重ノ事共有ケル
トカヤ。

(第二本 二五四べ)

〔用例二十六〕は後句が助動詞単独形の「むず」であるが、
〔用例二十七〕は「むず(んず)・らむ(らん)」、〔用例二
十八〕は「ぬ・らむ」であり、複合助動詞となっている用
例である。このように複合した形式が「さりとも」後句に

表れることは特徴的であり、単独形と比べてその情意性が相対的に増すことになるであろう。また「用例二十九」は後句が「などか……さる・べき」と「反語」「否定」となっているものである。

また、これらの「さりとも」の用例は引用節中のものであり、後句をあとの引用の助辞「と」が承ける形となっている。

すなわち、

▽〈さりとも……推量〉と〔引用動詞〕

形となっていると考えてよいであろう。

(三)〔後句省略〕〔と〕系

〔用例三十〕都へモ一日路也。サリトモト思ニ(ヒ)シ一谷モ被落ニケレバ、各心細(ク)ゾ被思ケル。

(第五本 二七四ペ)

〔用例三十一〕法師二成(リ)テ、心閑(カ)ニ念仏申テ、後生助カ(ラン)ト宣ケレバ、「御命バカリハサリトモトコソ存(ジ)候へ。定(メテ)奥(ノ)方へゾ流シ奉ラレ候ワンズラン。(略)ト、憑(たのもし)ゲニ被申ケレバ、(略)

(第六本 四三七ペ)

〔用例三十〕は「さりとも・と」、〔用例三十一〕は「さりとも・と・こそ」形(非)で、形態的には、助辞「と」の複合形であるが、ここでは「後句が省略された形」と見なすべきであろう。これは『宇治拾遺物語』〔用例十九〕〔用例二十〕と同質のものである、と考えられ、(一)〔推量の助動詞〕系からすれば、

▽〈さりとも(省略形)〉と〔引用動詞〕

と考えられる。

四、中世後期以後の「さりとて」と「さりとも」

四・一、キリシタン資料中の「さりとて」と

「さりとも」

『日葡辞書』には、「さりとて」単独では立項されておらず、「は」と複合した「さりとは」の形で取り上げられている。

・ Saritotena. サリトテワ (なりとては) 驚きを示したり、物事を強調したりする語。

例 Saritotena vōqina murigā. (なりとては) 大きな無理ぢや) 確かにそれは全くひどく無理非道である。

また、「なりとも」は「なりとも」単独の他、「こそ」と複合した「なりともこそ」も立項されており次のような指摘がある。

・ Saritomo. サリトモ (なりとも) 全く、あるいは、疑いもなく。

『また、ある人に対して信頼と好意を抱いていることを表わす語。例、

Saritomoto vomōtan coso canaxigere, Arunimo aranu miuo xirazu xite.

(なりともと思ふらんこそ恋しけれ、あるにもあらぬ身を知らずして)

私というものについても、今の私の状態についても、何もご存知ないのに、それなのに好意をもって私のことを思っ下さったり、また私の境遇について想像していらっしゃる、そのことこそが私を悲しませるのです。

・ Saritomoto koso. サリトモトコソ (なりともとこそ) 同上。

『日葡辞書』の記述からすると、「さりとて」「さりとも」共に〈逆接表現を担う形式〉というよりは、むしろ「全く」

「疑いもなく」等、訳出語からみても明らかのように、完全に一語化し「副詞句化」した〈強調表現〉として捉えているように思われる。また、「さりとも」には、「ある人に対して信頼と好意を抱いていることを表わす」、即ち、プラス評価の表現性が有していると指摘されているが、これは「さりとも」の語構成に「さ(さり)」という指示語があり、おそらく「指示性」という原義が関係しているのではないか。前提としての条件を共有するといったある種の「共有感」は、既にあるものを指示する「指示語」という性格からして当然のことであろう。ただし、指し示す内容が話し手の意に叶うか否かは、文脈的に依存すると考えられる。

一方で「さりとて」にも当然のことながら語構成からすれば「指示性」は存在するわけであり、ここでは「さりとて」は「は」と複合した「さりとては」のみしか採録されず、その表現性はニュートラルなのに対して、「さりとも」はプラス評価の表現性を有し、「さりとも」に続く後句が省略された形である「さりともとこそ」形が採録されるほどまでに「さりともとこそ」形が頻用され、慣用句化した、と解することが適当であるように思われる。

一方、ロドリゲス『日本大文典』には、「さりとも」は見えず、「さりとして」も『日葡辞書』同様単独では出現せず、助辞「は」「も」と複合した「さりとして」「さりとも」の形で「反戻」の項に取り上げられている。

反 戻

○To iyedomo (トイェドモ)°。Tomxedomo (ト申サユホ)°。
 Tomo (トモ)°。Toyútomo (ト言タユホ)°。Domo (ドモ)°。
 Tatoi (タトイ)°。Saredomo (サレユホ)°。Xicaredomo
 (然れユホ)°。Rebatote (ればユツ)°。Sarinagara (サリ
 ながら)°。Nagara (ながら)°。Saritoteua (サリユツは)°。
 Saritotemo (サリユツホ)°。Vo (オ)°。Ga (ガ)°。Domo
 (ドモ)°と同意。 『日本大文典』三〇〇ペ

この記述は、明らかに「さりとして」「さりとても」を、「反戻」、即ち〈逆接表現〉と捉えていると考えてよいであろう。前に指摘した『日葡辞書』の記述を勘案すると、「さりとして」「さりとても」には、二つの用法があると考えられるのではないか。即ち、前代と同様の〈逆接表現形式〉として用いられる用法、また、中世後期に新用法として出現した「全く」等の意の〈副詞(句)的用法〉、と両者を捉えるのである。

(表Ⅲ)

	逆接用法		副詞(句)的用法
『日葡辞書』	さりとして	×	○
	さりとも	×	○
『日本大文典』	さりとして	○	×
	さりとも	×	×

また、『日葡辞書』『日本大文典』では〈逆接表現形式〉について「さりとも」の言及が見られないことから、あるいは「さりとも」は、もはや用法が質的に変容してしまっただのではないかと考えられる。

また、ここで示唆的なのは、「さりとして」「さりとても」と共に「たとひ」が挙げられていることである。副詞「たとひ」は助辞「とも」等を伴った句と呼応して〈逆接仮定表現〉を表すが、ここでは「さりとして」「さりとても」が、まさに「逆接用法」から「副詞用法」へ変容する姿を窺うことができるように思われる(表Ⅲ)。

他のキリシタン資料において、『天草版伊曾保物語』では、「さりとも」は見えず、「さりとして」「さりとても」(形のみ)二例であるが、『天草版平家物語』では「さりとして

は「は」は一例、「さり」とても「は」は一例、となっているが、「さり」とも」が九例存しており、この「さり」とも」はそれ以後の作品類には、殆ど見られなくなるのである。

〔用例三十二〕その時イソボが述ぶるところの譬には「或る貧者いなごを捕らうずると行く路次において蟬を見つけ、即ちこれを持って殺さうとするところで、かの蟬の申すやうは、さり」とては我を殺させられよう事本意ない儀ぢや。(略)と事を分けて申せば、その者道理に責められて忽ち赦免致いた。

〔天草版伊曾保物語〕四三〇―四

〔用例三十三〕狼思うやうは、「さり」とては一口両舌な者ぢや。初めは呉れようと言ったが、今はまだ引き換えて躬を殺さうはやれ、皮を剥がうはなどと言うか」と言うて、すくすくそこを立ち去った。

〔天草版伊曾保物語〕四九九―七

〔用例三十四〕日ごろは院をも、内をもとり奉って、御幸をまなし奉らうと思はれたれども、このやうに法皇の捨てさせられたれば、頼む木のもとに雨のたまらぬこちをせられた。さり」とては行幸ばかりをなりともなし奉らうずると言うて、二十五日の卯の刻ばかりにおんこし(興)を寄せて、主上の六つにならせらるるが、(略)

〔天草版平家物語〕一八一―八

〔用例三十五〕お使ひ都へのぼって、この文どもを奉れば、北の方は見させられて、思ひ入って嘆かれた。お使ひ急いで下らうずる由を申せば、さり」とてもしばし御返事のあらうずるぞとあって、泣く泣く起き上がりこまごまと返事あそばされて渡された。

〔天草版平家物語〕二九〇―八

〔用例三十二〕〔用例三十三〕は、共に「さり」とては」の用例であるが、後句の文末形式が指定の助動詞「ぢや」となっており、前代までのそれとは明らかに異なっている。『日葡辞書』の記述に見られた用例も「ぢや」であり、ここでは「副詞的用法」と捉えられるように思われる。

一方では、『天草版平家物語』では、「用例三十四」〔さり」とては」は後句に「うずる」、〔用例三十五〕「さり」とても」は後句に「うずる」が存しており、前代と同質の推量の助動詞との共起した用法があることが分かる。

〔用例三十六〕(略)少将いとな泣いそ宰相殿のさてござれば、命ばかりはさり」とも乞い受けられうずるとなくさめらるれども、人目も知らず、泣きもだえられてござる。

(卷一 三七―十六 八五―八)

〔用例三十七〕平家国を靡かすことも十四箇国、勢の従うことも十万余騎、都へ近づくことも思えば、わづかに一日

の道であつたれば、今度はさりともとおもわれた。

(巻四 二七八―二三 五六七ペ)

〔用例三十八〕(略) 仲綱の言われたは…ただ今ここで鶏が鳴くならば、六波羅へは白昼にこそ寄しようずれ、夜討ちちにこそさりともと思つたれ…ひるいくさにはなんとしてみかなうまいと言つて、搦手は如意は峯から呼びかへす。

(巻二 一二三―十五 二五七ペ)

〔用例三十九〕その時成親卿言われたは…なにごととは存ぜねども、かかるめにあいまらするを御覽せられい、貴迎さやうにござれば、さりともこそ頼み奉つてござれ、

(略)

(巻一 三一一― 七三ペ)

〔用例四十〕さしも暑い六月に装束をさえもくつろげず、暑さもたえがたいによつて、胸もせきあぐる心地して、汗も、涙もあらさうて流れた。さりとも重盛は思ひはなされまじいものをと、言われたれども…たれして言わうともわくかたがなうておじゃつてござる。

(巻一 二九―一七 六九ペ)

〔用例三十六〕と〔用例三十七〕とを比較した場合、係助詞「は」が先行し、「さりとも」句を引用の助詞「と」が承けるという点、同質であると考えられ、〔用例三十六〕から〔用例三十七〕への後件句省略の過程も想定できるよ

うに思われる。〔用例三十八〕〔用例三十九〕は〔用例三十七〕同様「さりとも」後句が省略された形であるが、特に〔用例三十九〕「さりともこそ」は『日葡辞書』に指摘があるものである。ここでの「こそ」の「結び」は〔用例三十八〕「たれ」〔用例三十九〕「ござれ」と両者とも「已然形」であり、「こそ」には係助詞としての機能が未だ存することが解る。

〔用例四十〕は「さりとも」の後句に打消推量の「まじ(い)」が表れた例であり、注目される。平安中期には「さりとも」と「じ」が共起する用例が多いことは前に述べたが、「じ」が衰退し、「まじ」が進出した後、「まじ」との呼应例は甚だ少ないのである。

四・二、大蔵虎明本狂言集中の「さりとて」

「大蔵虎明本狂言集」では、「さりとては」のみで八例、用例が存する。

〔用例四十二〕(客人一)「苦しうなひ、こひ (太郎冠者)「身どもがやうな、物おぼへの有者は、しかり物じやまで(客人一)「さりとてはこひ (二)「むりによびいだす」(客人一)「各何と思しめす、あれが思ひよつた事があらふ程に、いはせてきかせられひ (くじぎい人 中 四九ペ)

「用例四十二」(主)「さて／＼おのれめはさた(沙汰)のかぎりな事をした、さだめてすて(捨)ゝおいた物であらふほどに、某がいてとつてこふ(太郎冠者)「やれ／＼御もつたひなひ事を仰らるゝ、こなたのお命とかへさせられうするか さりとては御無用で御ざる(と)りつく)」

(しみづ 中 六一ペ)

「用例四十三」(女出て、たそといふ、どんた郎がのぼつたほどに、あけよと云ふ、そのどんた郎は西国へくだつて後は、文のおとづれもなひに、何事をいしますぞ(どんた郎)「さりとてはどんた郎じや、しあはせもようてのぼつた、はやふあけさしめ(どんた郎 中 二五七ペ)

「用例四十二」『大蔵虎明本狂言集 本文篇』「頭注」には「ともかく。何にせよ。」という注があり、「一徑ノ趣サリトテハ、面白ソ」(中華若木詩抄・下)という用例を示している。ここでの文末語は「こひ」という「命令形」であり、「事情の困難さを認めた上で、なおかつ意図するこの実現を強く要求するのに用いる」(『時代別国語大辞典 室町時代編』)とされる用法で、前代には見られない新用法である。また、この、「ともかく来い」という意を考えると、〈客体的表現〉と言うよりは、〈主体的表現〉であるとも言えよう。

「用例四十二」にも『大蔵虎明本狂言集 本文篇』「頭注」に「ともかく。なんとしても。「カハイケレトモサリトテハキライテハソ」(漢書列伝笠桃抄)。」とあり、ここでの解釈として「なんとしてもおいでになってはいけません。」と指摘されている。

ここで、想起されるのが〈希望表現〉の変遷過程である。希望表現を担う形式の史的変遷過程で、例えば「がな」は、中世期に不定語「なに」と共起し、「なにがな」となり、副詞句化した。この形式の意味としては「ぜひとも」「何としても」等がこれにあたるが、このように〈副詞句化〉という、意味用法の変容のプロセスは「ともかく来い」のような表現形式への変遷に正しく類似している、と考えられる。⁽⁴⁾

「用例四十三」の文末語は指定の助動詞「ぢや(じや)」「であり、前代には見られない新しい用法であるがここでの主体は「どんた郎」であり、「用例四十二」「太郎冠者」等、その社会的属性は高くない。

近世初期の笑話集『きのふはけふの物語』中には、「さりとては」のみ二例用例が存する。

五、おわりに

これまでのことを、簡潔に纏めると次のようになる。

・「さりとて」「さりとも」は、接続詞的用法（〈逆接仮定表現〉）「さり・とて」「さり・とも」から、副詞的用法（〈まったたく〉「なんとかして」等の副詞句化）「さりとて」「さりとも」へ、と変容した結果、衰退した。

・「さりとて」は「は」と複合した「さりとては」形となり、文語的な場面で〈逆接仮定表現〉として用いられた。

・「さりとも」は心話文に用いられ、「へさりとも……否定（じ）」形「へさりとも……推量」形から「へさりとも（後件省略）」形へと変容した。

尚、附言すれば、冒頭の『今昔物語集』の「さりとも」の文末語はやはり「じ」であろう。翻って言えば「さりとて」が勢力を「さりとも」の用法にまで拡大する、正にその姿を映していると考えられるかもしれない。

今後、他の〈逆接仮定表現〉との関係について、更に考

「用例四十四」筑紫でも、安樂（あんらく）寺の建蓋（けんがい）（けんさん）の天目（てんもく）を、夜ごとに鼠（ねずみ）がきしりけるが、天目（てんもく）はかたし、鼠（ねずみ）の齒（は）がひたものちびて、このほどは尾（お）ばかりになりたる」といふた。「昨日（けふ）、日吉（ひよし）大夫（だいつ）勸進能（くしん）に隅田川（すみがは）をして、芝居（しばい）中（ちゆう）を泣（な）かせた。さりとては名人（めいじん）ぢや」といふ。〔きのふはけふの物語（むわし）六八（むはち）ペ〕

「用例四十五」何かと云（い）うちに、天下一（てんか）のまじなひてをよびければ、やがてまじなふて、其まゝりうこのごとくになつて、三間（さんかん）ばかりさきへとんで出る。みなく、「めでたひ事（こと）ぢや。さりとは天下一（てんか）一程（いちじやう）ある」といへば、若衆（わかしゆう）聞（き）給（たま）ひ、「名人（めいじん）ではなひ。あつたら物を、内（うち）へ入（い）るやうにしてこそ上手（うま）なれ。天下（てんか）二（に）でもない」といはれた。

（『同右』七四（ななよ）ペ）

「用例四十四」の「さりとは」の文末語は「指定の助動詞」「ぢや」であり、「用例四十三」と同一であるが、「用例四十五」は、「さりとは」の文末語が動詞「ある」単独（たんどく）となっている。旧用法であれば「推量の助動詞」と共に用いられ「あらん」とでもあることであるがここではそれがなく、新しい用法である〈副詞的用法〉であると考（かん）えられる。

えて行きたいと思う。御教授頂ければ幸いである。

(尚、本文は各種『索引』、岩波書店『日本古典文学索引』に依った。詳しくは森脇(一九九九)に示しているので参照して頂きたい。また、私意に句読点等を改めた箇所がある。)

【付記】今回こうして発表する機会をお与え頂いた上野辰義先生をはじめとする佛教大学国語国文学会の諸先生方に感謝申し上げる。また特に山口堯二先生には投稿をお勧め頂いた。日頃から先生の御論にお教え頂いてきたものとして、今後これを機に励みたいと思う。先生に深く感謝申し上げます。

また、用例の採取に当たって、国文学研究資料館「日本古典文学本文データベース」を利用して頂いたことを明記しておく。

【注】

- (1) 山口堯二(一九九六)参照。
- (2) 森脇茂秀(一九九四a)(一九九四b)参照。
- (3) 院政期成立とする説と鎌倉時代初期成立とする説があるが、ここでは中世前期の資料として扱った。
- (4) 例えば『日本文法大辞典』明治書院(一九七二)の記述を

参照のこと。また、何故「じ」が中古以降衰退したのかについては推量体系の変遷等も考慮し、稿を改めて考えてみたいと思う。

(5) 一般に、否定語との呼応関係から言えば、係助詞「も」と複合した形が広く用いられると思われるが、何故「さりとも」が広がりを見せないのか、文体差等が存するのではないかと、等様々想定できる。

(6) 「さりともこそ」については、便宜的に「さりとも・とこそ」と分析したが、あるいは「と」と「こそ」を分けずに「さりとも・とこそ」として「とこそ」を連語として捉えることもできよう。

(7) 「さぞかし」の「さ」等が参考となる。森脇(一九九九)参照。また、例えば他の語句「さりながら」については、Sarinagara. サリナガラ(さりながら)しかしながら、あるいは、けれども

と、明確に〈逆接表現〉として指摘している。

(8) 森脇(二〇〇〇)(二〇〇一)参照。「不定語」と「がな」が共起することで、文が終止せず、後に続く用法(副詞辞用法)が主用法となり、「不定語+がな」が副詞句化する、即ち、「副詞句内に収斂された」ことで、「がな」は衰退したと並行的に捉えることができるように思われる。

【参考文献】

- ・ 山口堯二(一九八〇)『古代接続法の研究』(明治書院)
- ・ (一九九六)『日本語接続法史論』(清文堂出版)
- ・ 鈴木芳明(二〇〇〇)「指示副詞サとサ系連語——指示性と一語化を中心に——」『日本語研究』二〇 東京立大学

- ・森脇茂秀（一九九四 a）「助辞『とて』の成立過程・意味用法をめぐって」（一）〔別府大学紀要〕三六）
- （一九九四 b）「助辞『とて』の成立過程・意味用法をめぐって」（二）〔山口国文〕一八）
- （一九九四 c）「順接から逆接へ——助辞『とて』逆接専用化への過程——」（別府大学国語国文学）三七）
- ・——（一九九九）「終助辞「かし」をめぐって——中世後期を中心に——」（山口国文）二二）
- （二〇〇〇）「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって」（一）〔別府大学国語国文学〕四二）
- （二〇〇一）「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって」（二）〔山口国文〕二四）

